

## 「種山ヶ原はいま⑫」 種山ヶ原を訪れた詩人たち②

草野心平氏 宮沢賢治を世に出した福島県出身の草野心平氏も種山ヶ原を訪ねている。それは、昭和38年「旅と宿」8月号の執筆のためと想われる。大切に守らなければと改めて思った。

詩「種山ヶ原」 草野心平 1963

部落で借りたモンペをはいて  
ながいこと来たかったこの高い原っぱに。  
いま。おれはたつ。  
そしてはまた。 歩きだす。  
北上山系のいちばんぼんやりのだだっぴろい弓なりの。  
チベットなんかと反対の。  
茫漠のモノトーンだ。  
セルリアンブルーの天なのだが。  
どうしたわけか一瞬霧が。  
すっとんできてまた。  
地べたの匂いでもかぐように流れていく。  
ミヤマハハコグサは食わないのかな。  
やたらに咲いている。  
と思った途端。  
こっちをめがけてヒヒヒン鳴きながらやってくる裸馬。  
三匹。五匹。いやもっと。  
塩も味噌ももったいないぞ。  
だのにおれの着物のそでをひっぱる。  
歯ブラシなどはつかわない歯。  
大きな眼玉。  
そのレンズにおれの顔が映り。  
まばたくと消え。また。  
映る。  
おれだけではないさっきの蛇紋岩の大きな塊もはっきり映る。

「旅と宿」1963年8月号

草野心平氏は「賢治文学の一つの背景」の中で次のように話している。

「賢治とゆかりのある土地を私も数ヶ所は訪ねている。そしてその度ごとに賢治とその芸術に就いて改めてジカに考える機会をもつことが出来た。例えば北上川の所謂イギリス海岸では「青白ひわれ 青白ひわれにおれの影」の賢治を思ったし、花巻温泉の日時計花壇では、それをつくったときの賢治の姿を回想できたし、種山ヶ原では賢治が歩いたにちがいない物見山への小径をふんでいった。……」

また、「所々方々 賢治の歌曲」の中で、次のように話している。

賢治には自分で作詞作曲したものが可成りある。「星めぐりの歌」「ポランの広場」「飢餓陣営」「種山ヶ原」等等。それらは楽譜を併記しないと興味は半減してしまうが。文句だけでも賢治調が出ていて面白い。」

「星めぐりの歌」の歌詞の最後は

アンドロメダの雲は  
魚の口のかたち  
大熊の足を北に  
五つのぼしたところ  
小熊の額の上は  
空のめぐりのめあて



《風の又三郎像の前で賢治の歌コンサート》

ここにはアンドロメダ星雲と大熊座と小熊座と北極星とが登場するのだが、その前にはさそり座、子犬、蛇などの星座群が出てくる。

これは賢治が花巻農学校の先生をしていたとき、歌を唱いながら生徒たちに星座の場を教えるために書いたものだと言われている。無論、作曲も賢治自身がつくったものである。



浅倉先生による「星めぐりの歌」の指導

一つだけ変わったやり方のうたがある。それはドヴォルザックの「新世界交響曲」の一部に合わせて書いた「種山ヶ原」である。

春はまだきの<sup>あけぐも</sup>朱雲を  
アルペン農の汗に燃し  
縄と<sup>まだか</sup>菩提樹皮にうちよそひ  
風とひかりのにちかひせり  
  
<sup>めぐる</sup>繞る八谷に<sup>へきれき</sup>劈癩の  
いしぶみしげきおのずから  
種山ヶ原に燃ゆる火の  
なかばは雲に<sup>とぎ</sup>鎖さるる

また同じく種山ヶ原を歌った「牧歌」がある。それは

雲の中で刈った草は  
どごさが置いたが  
忘れだ  
雨あふる

にはじまる岩手方言の詩だが、この作曲はモノトナスで岩手の風土の性格をキャッチした傑作である。

※モノトナスとは「単調な様」「一本調子の様」という意味らしい。